

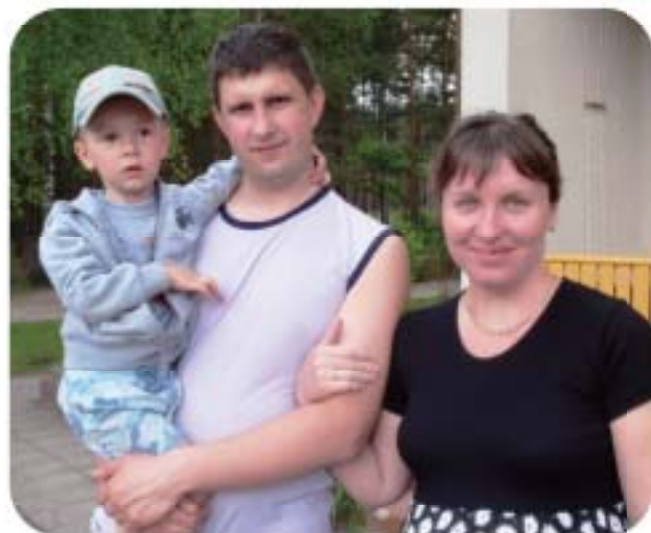
チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 87 2011年12月17日発行
郵便振替口座 「チェルノブイリ子ども基金」 00160-4-98316

今年もご支援を ありがとうございました

腫瘍病の子どもたちの保養
(ベラルーシ)
6/7/6/30



5/10 ~ 5/21
チェルノブイリ被害者家族の保養
(ベラルーシ)



6/1 ~ 6/14
汚染地域の子どもたちの保養
(ウクライナ)

☆ チェルノブイリ子ども基金設立 20年 講演「チェルノブイリと福島」
(11/20 開催) の詳細報告を掲載しています。

☆ 2012年チェルノブイリ救援カレンダーは完売しました！

チェルノブイリ子ども基金設立 20 年

チェルノブイリ子ども基金は今年4月で設立から20年を迎えました。多くの方々に支えられ、これまで活動を続けることができました。みなさまのご支援に心よりお礼を申し上げます。

1998年より開始した「里親制度」により支援を受けた子どもはこれまでに314人（うち85人が継続中）、2001年より開始した「奨学生制度」で95人の学生（うち8人は継続中）、2003年～2009年「若い家族制度」では33家族、「緊急支援」（里親が決まらない場合、子ども基金が一時的に支援）では46人です。また、1997年より開始した「甲状腺手術後の子どもたちの特別保養」（その後、汚染地域の子どもや、他の腫瘍病の子どもたちも招待）には、ウクライナ・ベラルーシ合わせておよそ2900人を招待しました。1994年に設立された「希望21」に滞在した子どもは、これまでに5万2千人。この滞在費の一部も設立当初より現在まで支援を続けています。

11月20日には設立20年講演会「チェルノブイリと福島」を開催しました。3月に起きた福島原発震災を受け、チェルノブイリの情報はますます重要になっていくと思われます。チェルノブイリの被害は今も続いています。彼らへの支援を続けるとともに、日本の子どもたちを守るための情報を発信し、姉妹団体「未来の福島子ども基金」と連携していきます。私たちが長年支援を続けている「希望21」の医師からは次のようなメッセージが寄せられています。「どうかチェルノブイリの経験を活かして下さい。日本には高い技術力があります。医療水準も高いです。それらを駆使して日本の子どもたちを守ってください」



2011年の支援活動報告

今年も皆様の募金のおかげで以下のような支援活動を行うことができました。ほんとうにありがとうございました。

	円	内訳
ウ ク ラ イ ナ	医薬品代	774,800 内分泌研究所:医薬品
	運営費	433,900 ウクライナ慈善団体「チェルノブイリ子どもたちの生存」
	特別保養費	985,664 汚染地域の病気の子ども
	医療機器	3,848,700 オブルチ地区病院産科:人工呼吸器、保育器
	合計	6,043,064
ベ ラ ル ー シ	医薬品代	932,606 ベラルーシ慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」
	運営費	798,011 ベラルーシ2 慈善団体*
	保養費	3,657,022 「希望21」汚染地域の子ども
	特別保養費	1,114,593 甲状腺手術後の子ども・腫瘍病の子ども
	特別保養費	391,289 チェルノブイリ被害者家族
	医療機器	2,325,220 ゴメリ市中央小児病院:心電図測定機
合計	9,218,741	

*「困難の中の子どもたちへ希望を」「チェルノブイリのサイン」/保養費には交通費・保険代を含みます。

医療機器支援の報告

医療機器支援募金には、12/10 までに 75 万円のご寄付をいただきました。ほんとうにありがとうございます。一般募金と合わせてベラルーシゴメリ市中央小児病院・第3分院へ心電図測定器を贈りました。病院から手紙と写真が届きました。

「チェルノブイリ子ども基金のみなさまへ。2011年10月19日に医療機器が設置されました。私たちはこの機器の性能の素晴らしさを確認しました。私たちの病院へのご支援に、深くお礼を申し上げます。この医療機器はチェルノブイリの子どもたちを助けることに役立ちます。みなさまのご健康とご成功をお祈りします」

ウクライナジトーミル州オブルチ地区病院産科への医療機器は現在手配中です。現地より連絡が入り次第、ご報告します。



検査を受ける子ども



モニターをチェックする医師

2012年支援の予定

<ベラルーシ>

児童健康回復センター「希望21」:このセンタ

ーでは放射能汚染地域に暮らしている子どもたちを、年間を通して受け入れています。「子どもたちの保養費用の一部」を支援します。全額子ども基金の費用で「腫瘍病の子どものための特別保養」「甲状腺ガンの手術を受けた親とその子どもの特別保養」をこのセンターで実施します。

慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」:

この団体を通して特別保養に参加する子ども・家族が選ばれます。ベラルーシの里子・奨学生の窓口となっています。会員の子どもの薬代、スタッフ給料と事務所維持費の一部を支援します。

慈善団体「チェルノブイリのサイン」:

団体はすでに解散しましたが、里子への支援金受け渡しや、元会員たちの「希望21」への保養は引き続き行われるため、スタッフ2名分の給料と通信費を支援します。

<ウクライナ>

病院「内分泌研究所」:甲状腺の病気の患者の薬代を支援します。

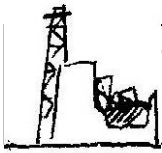
慈善団体「チェルノブイリ・子どもたちの生存」:

この団体を通して特別保養に参加する子どもが選ばれます。ウクライナの里子の窓口となっています。スタッフ給料と事務所維持費の一部を支援します。

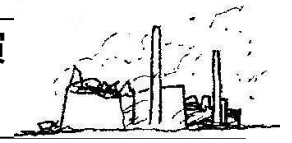
「汚染地域に住む病気の子どものための特別保養」:

今年実施したクリミア半島の「子どもサナトリウム」で実施します。

里親も引き続き募集しています。現在3人の子どもが支援を待っています。関連記事は14頁。



チェルノブイリ子ども基金 設立20年 広河隆一講演 「チェルノブイリと福島」 2011年11月20日



私たちは 事故発生の時 何をすべきだったのか
これをいい加減にしてしまっは、その後の対処もなかなかわからないので、この問題からいきたいと思います。

事故発生から5日間から1週間の間にいろいろなことが起こってしまいました。「DAYS JAPAN」では、その間に起きたことをもう一度見直すということに取り組んでいます。

15日の昼以降であれば、東電と政府の会見を全部記録しているという人には、それらを全部提供してもらいました。今度は11日から15日の昼までの間を記録している人たちを探しているところです。そして、それらをどう分析していくか。

ジャーナリストたちの集まりで、もし自分がジャーナリストだと言うのなら、事故発生時にあなたは何をすべきだったか、という問いかけをしました。もしあなたが医師だったら、事故発生時に何を呼びかけて、何をすべきだったか。それから親であれば……、自治体で働いていれば……というものもあるでしょうし、物理学者であれば……。

いろいろな人が大事故は起こると言っていましたし、わかっていたけれども、起こったらどうするかということを考えた人はほとんどいなかった。

これは、**チェルノブイリ原発**から3キロから3.5キロの間で撮った、**爆発した4号炉の写真**です。手前にお墓が見えますが、**墓参り**は1年間2時間だけ許されています。

4号炉を遮蔽している石棺がどんどん崩壊してきています。いま新たに、これをドームで覆ってしまおうという動きになっていますが、結局、ドームを作る会社も原発を作る会社と同じ会社なんです。事故が起こっても儲かる仕組みがちやんとできています。

今年の2月にもチェルノブイリに行きましたが、この数年間、現地の医師や被害者に会って強く感じることは、汚染のひどい地域からの避難民の人たちはもちろんですが、「ここは安全です



よ」と言われて残った村や町の子どもたちの中で病気が多発しているということです。

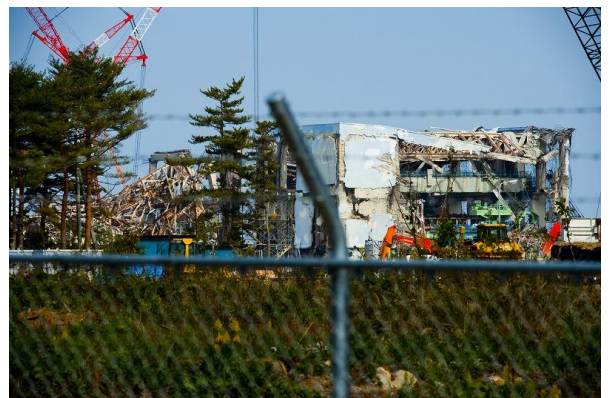
◇

福島原発 4号炉の写真です(下段)。民家の裏手に煙突が見えるのが4号炉です。とくにジャーナリストには一切が封鎖され、中で何が起きているかわからないという状態が続きました。それに対して抗議もしましたが、11月12日に記者クラブの人間だけを、バスから見学させました。ぼくたちフリーランスにはそういう機会がなく、自分たちが調べなきゃいけないことを調べる、そういう状況です。ぼくは何回か現地に行っは撮影できる場所を探して、ようやく1か所、ここからだけ撮影できたのです。これは、10月の終わりに撮影したものです。

◇

3月11日に事故が起こって、12日に東京を出発して、道の寸断と渋滞で、郡山に着いたのが夜。そして13日の朝に郡山を出発して、原発の方向に向かいました。

ここ双葉町で、ぼくが持っていた測定器は振り切れています。100マイクロシーベルトまで測れる機械で、放射能というのは色も形もないし、その瞬間に何かを感じるというものもないんですね。そういうときもあるのですが、それが本当に放射能のせいかどうかはわからない。だから、放射能がそこにあるかどうかは、測定器の針を信じるしかないのです。これを見ながら、これくらいだったら留まろうとか、舗装された道の上だったらこのくらい、草むらに入っていく時はとくに用心して進むと。この機械の針が振り切れたのは、今まで50回くらいチェルノブイリに行っていますが、初めてです。



福島第一原発 右が4号機、左が3号機 10月撮影

このとき政府は、安全だ、安全だ、出ている放射能は微量だ、心配ない、直ちに影響は出ないとか言っていました。だから 20 キロ圏内の人たちは皆、避難しなさいと言われますが、それは万が一のことを考えてのことで、放射能は出ていない、心配ないなどと言われました。2、3日の避難だと聞いた人たちもいるんですね。だから、3日目になって、天気は晴れているし、放射能が出ていないのだったら、今のうちに残した預金通帳だとか印鑑を取りに帰ろうと戻った人が多いんです。ペットに餌をやろうとか、ビニールハウスの作物に水をやろうとか。人々はこれだけ放射能が多いということにまったく気がつかないままで、NHK を始めとしてあらゆるテレビは、「安全だ、安全だ」とキャンペーンをしていたわけです。

機械を持っていたジャーナリスト仲間 3 人もが、針が振り切れた。一人の機械は 1000 マイクロシーベルトまで計れる機械だった。それも振り切れるとなると、どれぐらいになっているかわからなかった。そういうなかで、みんなしなくてもよい被曝を受けている状態だったわけです。

彼らは、安全だと言ってしまったことに対して、今さら危険だなんて言えない、そういう状況で上塗りしていったその結果だと思えます。

彼らは実は移動モニタリングカーで検査をしていて、その結果をあとになって公表し始めます。膨大な数の測定データが記者会見のなかで発表され始めていきます。でも、その中にはこの地域の結果がない。だから、ほら大丈夫だったんですよ、ちゃんと検査をしているのに、出ている放射能はなかったんですよということを繰り返してい続けたのです。

ところがその結果の中で——ここは原発から北西の方向で、もう少し行ったところに飯舘村とかがありますが——その北西方角のモニタリングの結果はずっと発表されていなかった。発表されたのは 5 月 28 日。2 か月以上たってから、何食わぬ顔で、記者会見の中で数字をワツと入れられたんですが、それを問題にするような記者は誰もいなかった。これはとっても残念なことです。「あなたがジャーナリストだったら、あの時自分は何をしなければいけなかったか」。それを、この間のジャーナリストの集まりでも伝えたかった。

◇

3 月 12 日、測定をしながら、入ってくる人々に逃げてもらいました。僕らも逃げようとしているときに、子ども連れの車が来ました。車をストップさせて、危険ですから進む

のはやめてくださいと言ったら、「すぐ右にまがって 30 分くらい行ったところに川内村という村があって、そこには避難所を作っていて、子どもたちがいっぱいいます」と言う。僕は後ろをついて行きました。そこは、第一原発から 20 キロくらいの距離にありました。

その川内村の副村長が事故対策委員長のような感じだったので、事情を説明しました。これだけの放射能がある、そこにいたのは富岡町からの避難民の人たちだと思いますが、彼らに、今日は戻ることができないと伝えてください、できれば検問所を設けて、放射能の値が低くなった時に入るようにしてほしいと伝えました。そして、できれば女性と子どもはすぐに避難してくださいと言いました。

そこは原発と海岸に沿って並行した道なので、逃げようと思ったら、直接遠くへ逃げるということが難しい。大きな道に出るには、原発に並行して逃げなければならない。そのときにパニックになると渋滞になる、渋滞になると長時間被曝し続けることになる。だから万が一のことを考えて、先に逃げてほしいと伝えました。

その 2 日後、14 日に自主避難が始められたようですが、先日講演をしたときに、川内村からの人がいらして、「よく言ってもらった」とおっしゃってくださって、ぼくも本当に嬉しかったです。それは小さな例です。ほとんどのところでは、県の指示、国の指示がないから、国が安全だと言うから避難しなかった。それだけでなく、テレビというのは、保安院の発言、電力会社の発言、彼らは安全と言っています、とそのことを伝える道具になっていた。大本営発表を伝える機関、国の広報機関になってしまっているわけです。

国が嘘をつくというのはわかるわけです、電力会社が嘘をつくのもわかるわけです。彼らは責任者ですから、責任を認めたくないのはわかる。だから私たちにはある程度、ああ言っているけどどうなんだろうという気持ちが働くのですが、11 日の夕方から夜にかけてのある時間を区切りにして、政府、保安院、電力会社がこう言っていますけどもどうなんでしょう、ということを受ける人たちがテレビに出始める——NHK の記者、あるいは呼んでくる東大の先生が、「いや、放射能は出ているけど少ないから大丈夫です」と追認していくんですね。政府が言っていること、電力会社や保安院が言っていることを NHK が保証していくことになる。これは本当に犯罪だと思えます。

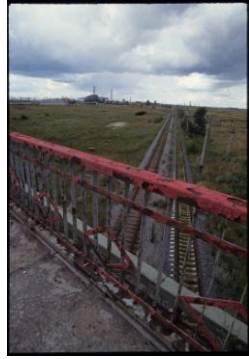
それまで NHK は伝える機械だった。それももちろんおかしい、政府などが安心だと言っているのを、自分たち

で取材もしない。NHK は社員が原発に近づくことを一切禁止しています、ということ公表すればいいのに、それもせずに、だんだんと政府や電力会社を追認していく。

そうすると一般の人たちは、電力会社が危なくないと言っている、それをNHKも保証しているという気持ちになっていくわけです。多かれ少なかれ、多くのメディアはそういう方向になっていった。

◇

チェルノブイリ原発に通じる線路の写真です。除染ということを考えて参考になるかもしれませんが。この一帯は松の森でした。放射能で真っ赤に染まった森を、現地の人たちは「ニンジン色の森」とか「赤い森」と呼んでいました。歩くだけで放射能で火傷するくらいに汚染されていたので、すべての木を切り倒して埋めました。しかし、そうすると今度は、雨が降ることによって放射能は地下水にしみ込み流れて行く。その先には、キエフという大都会の貯水湖がある。そちらに流れて行くわけです。



それだけでなく、雪解けの頃には時々パニックが起こるのですが、降り積もった雪は、周りの土砂も一緒に川に流れ込んでいきます。原発周辺のプリピャチ川の土手には、ものすごい量のストロンチウムがある場所があります。ストロンチウムは水に溶けますので、そのストロンチウムを含んで水は流れていくのです。プリピャチ川はドニエプル川に合流しますが、合流してちょっといった下流にキエフ市の貯水湖があるのです。

そういう話が親戚の間に電話でパッと広まったりするんです。10年、20年後でもそういう噂——とにかく水を汲み置きなさい、そろそろ溶けてくるみたいだから、気をつけて。あるいは、紛れ込み始めたという話が。

◇

チェルノブイリ事故のとき、実際に急性放射線障害で亡くなった人は28人とされています。

この数字を原子力産業は逆手に取っています。事故で亡くなったのは28人だけだと。福島で事故が起こり、チェルノブイリと同じクラスではないかとみんながザワザワしたときに、心配ない、チェルノブイリではそんなに人は死んでいない、病気にもなっていないと、国がキャンペーンをはりました。電力会社もやりましたし、保安院もやりました。

た。官邸そのものも。そのときに使われた数字が、「28人だけしか死んでいない」でした。

しかしこの数字というのは、モスクワの病院に運び込まれて2週間以内に亡くなった人の数だけで、実際はもっと多くの人が運び込まれていますし、2週間以後に亡くなった人の数は入っていないのです。なぜ放射能のせいで亡くなった人は2週間以内に亡くなった人だけで、3週間目以後に亡くなった人は違うのか、誰も説明できない。そんななかで、とにかくこれしか死んでいないということを繰り返すんですね。事故処理作業にあたった人たちの中で死んだ人も、病気になった人もいない、避難民の中にもそういう人たちはいないと。

私たちはそういう数字のカラクリにごまかされてしまうんです。医学者たちがたくさん統計を集めたなかでこれだけです、100ミリシーベルト／年以下のところでは、ガンは発生しないのです、などと言われたら、へえそうなんだと思ってしまう。

しかし、それを覆すデータをこちらは持っていません。1990年から91年にIAEAの調査団が小児甲状腺がんの発生率の調査をしましたが、彼らは小児甲状腺がんの発生率は増えていないと発表しました。彼らはたいへん大掛かりな調査をしたと言いました。そうすると、世界中から学者が来て、そんなに大きな調査をしても、甲状腺がんの子どもは現れなかったんだと、私たちは思わされてしまいますが、小児甲状腺がんというのは、ヨーロッパでは100万人に一人ぐらいにしか現れない病気なんです。ぼくはそのときに厚生省に問い合わせたのですが、子どもにとっては稀な病気なので、日本ではその統計すらないということでした。

小児甲状腺がんの発症率がすごい高まってきたと言えるようになるまでには、どのくらい調査をしなくてはならないのか。彼らがやったのは大人と子どもをあわせて700人。子どもは350人位。350人に一人の小児甲状腺がんが現れるということは、世界の平均の3000倍から4000倍にその病気が増えているときでなければ見つからないのです。

病気の人はいないとか、放射能による病気ではない。みんなが放射能が怖いと思っているからストレス性の病気が発症するのだと。日本でも同じことを言っていますね、学者が。チェルノブイリのときに言ったことと、すべて同じです。

そういうふうに進めていくのが、IAEA、国際原子力機関が代表する、世界の原子力推進産業、核産業です。何もなかったことにする。そうすると、これからも原子力はこれからも進展できる。だからデータをすべて自分たちのものにする。これだけの病気があるということは彼らが決めて発表すると。

それに対してチェルノブイリの地元の人たちは抵抗しました。とくに小児甲状腺がんの研究者たちは、あれだけの事例を見せているのに、国際機関はそれを一切無視したと。WHO に持って行ってもダメなんですね。WHO と IAEA は協定を結んでいて、放射能に関する病気の場合は、IAEA の許可がなければ WHO は発表することができないというようになっています。だから、WHO は信頼できる医学機関であるという考え方は、放射能の病気に関してはまったく当てはまりません。彼らはすでに、IAEA のコントロール下にあります。

現地の医師たちは、小児甲状腺がんがこれだけ出ているということを言うために、自分たちで研究をします。スイスとかから、IAEA や WHO に毒されていない信頼できる、人権的な医者、しかも権威者と呼んで自分たちの発表を追認してもらうんです。そして、雑誌『ネイチャー』に自分たちの発表と彼らの発表を並行して載せて、そこまでいって初めて、IAEA や WHO のほうも無視できなくなっていくんです。何年もたってからですね。初期のスクリーニングで見れば助かったはずの子どもたちが、その機会を奪われていく。後でようやく IAEA が発表していく。放射能のことというのは、医学者はほとんど経験がないと思ってください。ぼくは専門家でもまったくありませんが、現場で、被害を受けている人たちに会って、彼らが訴えることや、自分の目で見たりすること、医学者たちが言うことが、違うのです。

それが皆、救援のチャンスを奪っていった。(国が)安全だと言うから、危険だと言うことを発表できない。原発の作業すら安全だと言い続ける。彼らには、病気になっている子どもたちが現れないようにすることが必要だった。いまだそれを福島でやっているわけです。

人々を避難させるべきか 人々に汚染を知らせるべきか チェルノブイリで 激しい議論が起こった

チェルノブイリ事故が起こったときに、原発から 4 キロほど離れたところに、5 万人が住むプリピャチという街があり、そこに事故対策委員会が設けられました。日本の事故

対策委員会というのは、ほとんど電力会社と政府官邸と保安院で構成されていますが、チェルノブイリでは市民の代表が入りました。もちろん共産党の時代ですから、共産党委員会の委員も入っている、軍の代表、それから消防も原子力関係の人も。いろいろな人たちが入っています。その時に、避難させるべきではない、人々に汚染を知らせるべきではない、ということを主張したのは医学者です。放射能の関係と結びついている、つまり IAEA 関係の医学者たちです。こういうような人たちは、原子力を推進する所では必ず現れてきて、安全ですと言う。それをマスコミが取り上げて「安全です」キャンペーンをする。日本でもまったく同じなわけです。

医学者だけが、ここにいっても心配ない、直ちに影響がでることはない。異常はないから、安全だからここに住み続けるようにと言います。人々が街から逃げてしまったら、旧ソ連で大きな事故が起こったということが、外国にバレてしまう、そのほうが怖いと。健康の味方、人間の味方ではないわけです。原子力産業をどう守っていくかという。医者なのに、医学者なのにそういうことをやっていくわけです。

それに対し、物理学会の人たちは、ここはもっと放射能がひどくなると言い続けます。消防の人たちは、同僚がどんどん倒れていっているわけですから、危険であるということをよく知っている。軍も外に向けては秘密の団体ですが、一応その目的というのは、国民を守るためにあり、核戦争を想定していろいろ研究しているわけですから、よく知っているわけです。これからもっと大変なことになる、被曝というのは手をつけられなくなる。だから今のうちに避難しなきゃいけないと。最終的に決め手になったのは、プリピャチの街の代表が言った「この街には 1 万 7000 人の子どもが住んでいる」。その言葉が決め手となって、翌日人々は避難します。

人々が避難した後のプリピャチです。ここで、1 メートルくらいの高さで測定すると、3.8 マイクロシーベルト/毎時、3 マイクロシーベルト~4 マイクロシーベルトの間です。それは、福島県の学校で運動してもよいという、そういう数字なのです。

30 キロ圏の避難は、女性と子どもが優先された

30 キロ圏の避難の命令が下るのは 5 月 2 日、4 月 26 日に事故が起きてから 1 週間ぐらいたった後に、30 キロ圏はやっぱり封鎖するという命令が出されます。もちろん、

それまでの間にいろいろな討議があり、主に軍が決めていきました。5月2日に皆一斉に避難しろと言ったら、プリピャチの避難のときのように大騒ぎになって、放射能にさらされたまま時間がかかってしまうということがわかっていましたから、この日、命令とともに逃がすのは、女性と子どもだけということになったのです。そして、翌日から男性が避難する。

飯館村のことでわかるように、農民は家畜を置いては逃げられないということがわかっていましたから、ウクライナ中から家畜の移送車を集めました。それで、家畜が避難すると同時に農民も避難する、そういう措置をとりました。

120 キロ離れた キエフ市からも 子どもたちが避難した

チェルノブイリ原発から100キロ～120キロのところにはキエフ市があって、その場所は旧ソ連ウクライナ共和国の首都で、当時約250万人が住んでいました。ウクライナの人たちにとって幸いだったのは、当時の閣僚評議会の代表、つまり首相にあたる人が女性だったことです。その女性が何をもとに安全か危険かを見分けなければならないかということを知っていたわけです。子どもですね。あるいは妊婦。

子どもや妊婦を中心に考えなければいけない。大人にとって安全だということを、子どもに適用してもダメだということを知っていた。10月10日に、園田康博(内閣府大臣)政務官が記者会見で放射能で汚染された水を飲むと言いました。別に、彼が飲んでも構いません、彼がどうなっても、どうぞご自由になしてくださいと思います。だけど、彼は自分の娘の孫にその水を飲ませるよう、自分の娘さんを説得できますか。万が一というのは最悪のことを想定してやるわけですから、もしかして何かあるかもわからないという思いで、皆やっているわけです。しかし、そういうことを一切抜きにして進めるんですね。

◇

ところがウクライナの場合は、首相が女性だった。彼女はまず、モスクワから来る人たち——、つまり旧ソ連の指導者たちがここは安全です、ここは影響ありません、心配ありません、窓を閉めていたら大丈夫、まあせめて家に入るときには足の裏を雑巾でふきなさい、というようなことを言うのですが、あなたはあなたのお孫さんをこの街に住まわせられますか？ と詰め寄っていくわけです。

そして、本当に安全だと思うのなら署名しなさいと、半日くらい粘るのですが、中央から来た人間たちはどうとう、「ここは安全です、心配ありません」と書いて署名をするわけです。それは未だに証拠資料としてチェルノブイリ博物館に保存してあります。もちろん、上の人間が水を飲んだから安心だという気になるほど、女性はバカではない。彼らが署名したからといって安全なんか保証されるわけではないということを知っていたので、彼女は関係者を収集して、12日には学校を閉鎖すると決めたわけです。事故から20日間弱ですね。そしてウクライナ中から列車をキエフに集結させて、14日には避難を始める。全員の子どもたちに早めの夏休み、そして保養をプレゼントします。憧れのクリミア半島や黒海沿岸の保養所に行けるんだよと。子どもたちは大喜びです。

いま日本では、子ども一人だけを避難させるために、親の反対とか、あの友達を置いて自分は避難できないといったところに、追い込んでいくわけです。でも、ウクライナでは政府が、「避難」という言葉を使わずに「楽しい夏休み」と言い、ものすごい数の子どもたちが列車で出て行く。その間、保養所に予約を入れていた金持ちたちはみんな追出されるわけですね。そういうことを、ウクライナはやってのけたんです。

◇



村があったところの跡です。最初は、屋根を水で流したりとか、村の中は土の道ですから、埃が舞い上がらないよう舗装したりしていたのですが、そう

いう所だけを除染したって人間は住めるものじゃないということがわかる。結局、除染は役に立たないということがわかって、村は全員で逃げるという決定をしました。

日本は、大したことはないとアピールするために、政府はちょっとでも除染すればそこに住めるんだと言います。反対に、チェルノブイリは、住めない所は住めないと判断していく。チェルノブイリで強制避難の対象地に、日本では人々が住んでいるのです。

事故が起こったあと、日本の学者も、とくに IAEA 関係の人は、28人しか死ななかった、急性放射線障害というのは28人だけに起こったんだということを言い続けるん

ですね。他の人たち、避難民にも働いている人間にも一切なかったと言っている。

そういう人間たちにとって、そういうことを言っているようなIAEA、原子力の息のかかったような学者たちにとって一番困るのは、避難民たちのカルテなんですね。避難する途中の病院で診断を受けたのですが、そのときのカルテが残っているんです。急性放射線障害の症状が書いてあるわけです。喉にどのくらいの放射能を浴びていたかとか、喉が原子炉みたいとかいう表現もある。それで、嘔吐とか下痢とか発熱とかの症状でどうにも動きがとれなくなった人たちのことが、みんなここに記録されているわけです。これはまずい、これを世の中から消さなくてはと思うわけです。

ホイニキという街の病院のカルテの貯蔵庫は3回火事になっています。ここの病院の副院長がカルテだけを助け出したんです。そのために彼は、副院長から一般の医師に降格させられてしまいます。

小児甲状腺がん多発を徹底して無視したのは IAEA ほか原子力と結びついた医学者たちだった

この人たちの力を侮ってはいけません。福島医師会の人たちも、自分たちが調べたことをそのまま患者に伝えることすらできない。全国の人たちを傘下におさえています。

そういうところで、自治体がホールボディーカウンターなどを持っていたとしても、あるいはその人たちに測ってください、どうぞどうぞと言っている。けど、「その結果は教えてくださいませんか？」と聞いても、いや教えませんと、6月か7月頃までは完全にそうでした。とにかく調べます、でも結果は教えない。どうしてなんですか？と聞いても個人情報だからと。本人が知りたいと言っているのに。メチャクチャなことを言っているんですね。

日本が、25年前のチェルノブイリと違うのは、やがて一般の人たちが測定器を持ち始めていくということです。お母さんたちが危機を感じて、文科省の前に汚染された土を持ってきて、抗議していくという形で運動が広がっていきます。ああいうことは、かつては人々の大きな運動としてはなかった。それはIAEAにとっては想定外だった。

そして、市民の測定室のようなものもできていく。市民が測ってしまったら、自分たちのところにデータが集まらないから困る。慌ててなんとかうちに来てくださいと言う。

でも、未だに原発で働いている人にも、詳しいデータは渡していません。



◇

このベッドに座る女の子は、10年近くたってから甲状腺がんだとわかった子です。手術を待つ前の日です。そして、手術の当日、手術台の上です。こういう子どもたちがどういう思いでベッドの上に寝かされているか。医学者たちは数万人に一人ですとか、一言で言える問題じゃないんですよ。自分のクラスとか学校に一人とか、現れ始めるころがきます。そういうときに、次は自分ではないのかと、どんなに恐ろしい気持ちになっていくか。そして、喉に手術の跡が残ったりすると、自分は放射能を余計に浴びたということ人を知られたくないためにプールには入らないし、友達とはつきあわない、学校には行きたくない、そういう形になっていくわけです。

発見が早ければ、それが転移するのを免れるかもしれないけど、発見が遅れてしまう、大丈夫だ、大丈夫だと言うことは、発見が遅れる、チャンスがどんどん遅れるということなんですね。そうなってしまうと肺がんになったり、リンパ腺に転移したり、それから体中に転移して、それが脳に転移した時にはもう助からないと言われていきます。

原発から60キロのホイニキという街ですが、汚染がとてもひどかった地域で、そこで母乳を与えている女性です。

93年です。93年には、ベラルーシ中の人々の母乳が検査され、検査した全員の母乳からストロンチウムとセシウムが発見されています。事故から7年も経った後です。



それが原発から遠く離れたところの女性の母乳からも発見されているのです。それはなぜかと思ったら、食べ物です。食べ物は何百キロでも流通します。体にストロンチウムとセシウムを蓄えて、それが子どもにいく。そういう状況になっているのです。

それが原発から遠く離れたところの女性の母乳からも発見されているのです。それはなぜかと思ったら、食べ物です。食べ物は何

百キロでも流通します。体にストロンチウムとセシウムを蓄えて、それが子どもにいく。そういう状況になっているのです。

食べ物の流通は大きな問題になっていきます。それは、産地に気をつけるのも一つですが、それでは済まされない。彼らは何十キロも離れたところにおいて、その地域から危険なものが運ばれたということを知らないわけです。汚染された食物でも売らなければならない、困っている人たちは当然、産地名なんか出さないですね。

だいたいは隠します。今回の日本も同じです。私たちが知っているのは、氷山の一角なんです。ぼくの知り合いの親戚がやっている夜の仕事というのが、福島から食べ物を夜間に運搬する仕事なんです。名古屋に持ち込み、名古屋の市場で売られていきます。非常に値が安いので、西日本の業者が買い付けにきているそうです。そうなったら、何をされるかわかりません。

だから、私たちは自分たちを守るためには、自分たちで測るしかないんです。そういう検査機関を持つほかにないと思います。

◇

これらは、最近よく見かける名前です。

ABCC(原爆傷害調査委員会)

・放射線影響研究所(重松逸造初代理事長)

・IAEA チェルノブイリ調査代表

・放射線影響研究所(長瀧重信 2 代理事長)

官邸ホームページ記述者

長崎大元医学部長 名誉教授

チェルノブイリ調査を行う

・福島県健康リスク管理アドバイザー

山下俊一長崎大教授

長崎大の長瀧氏の部下

福島医大副学長

ABCC(原爆傷害調査委員会)は米軍の機関です。広島に作られました。放射能はいかに効力があるかということ、被ばく者の人たちをずっと調べていくんです。それがあつたとき、名前を変えます。放射線影響研究所。初代理事長が重松逸造氏、彼が IAEA チェルノブイリ調査の代表だったのです。大丈夫、心配ない、ストレスのせいですと言ったのが彼です。子どもに病気は発生しませんとも言いました。

それで、第2代の理事長が長瀧重信。官邸ホームページに、「死んだのはたった 28 人です」と書いた。彼は『ネイチャー』にチェルノブイリの医師たちの研究が載ると、と

うとう認めざるをえないのですが、小児甲状腺がんが亡くなったのは 15 人、そして 28 人、たったそれだけです、何万人も死んだというのは大ウソですということ、福島の事故のあと、官邸の HP で発表しました。それを菅首相が認めるという形になりました。

長瀧重信氏は長崎大元医学部長で名誉教授。その後もチェルノブイリで調査をずっと続けています。お金は日本船舶振興会(現・日本財団)から出ます。福島県の健康リスク管理アドバイザー、現在の福島の人たちを全部調べて追跡調査をする、その責任者になっているのが、山下俊一、元長崎大教授です。元長崎大の長瀧氏の部下。そして彼は福島医大の副学長になっています。彼は世界中から学者を集めて調査をしようと話しています。みんなの体を調べよう、データを全部集めなきゃいけない。下手すると、民間で調べられてしまうかもしれない、これが彼らにとっては危険なんです。自分たちのところで、データをすべて自分たちのものにしたい。彼らはそう思っています。

この流れは世界中で同じです。しかもこういう人たちによって、数字が操られて、100 ミリシーベルト以下は病気になるまいとやかまわられているわけです。

◇

この女の子は事故から 10 年後ぐらいに甲状腺にガンが発見されましたが、見つかったときには脳にまで転移していました。もう治療ができないということで、自宅で痛みに堪えるという毎日でした。



こういう子どもたちがでることに對する責任は誰にあるか。もちろん、心配ありません、子どもに甲状腺がんはありませんと言った IAEA 他の機関にあるし、その団長にあるし、心配ありません

と発表した日本人の学者、ナガサキの名を背負って発表していくような学者たちにあるわけです。

医者たちは何も言えなくなっていくわけです。どうしてなのか、僕にはわからなかったんです。あるとき、本当に腹が立ったから、ヒロシマで医者に食ってかかったことがあるんです。どうしてあんなものはデタラメだって言えないんですか、って。IAEA から多額の研究費が出てます

からって、その人は正直に言いました。それは広島の日赤十字の病院です。



自分たちのことは自分たちで守らなくてはいけない。ドイツには、チェルノブイリの後、たくさんの雨が降り、何を食べたらよいのかわからなくなりました。そこで、市民の手で放射能測定所を作らなくてはいけないと考えて、ベルリンとかミュンヘンに市民測定所ができました。コンサートをしてお金を集めたそうです。クリスマスの前には、子どもたちのお菓子などを集めて測る、小麦が生産される頃には、全国の小麦を集めて発表する。何が安全だとか、危険だとかではなく、何々が何ベクレルあったと発表するのです。そうすると、これは子どもには食べさせない、自分はよいとか考えるようになる。しかし、ある程度の上のものに関しては、気にする人は買いませんよね。売れなくなりますよね。安全だと思っていたものが本当は汚染があったということがわかって30ぐらいの会社が倒産したということです。

その頃はパソコンがないので、リーフレットを発行して配りました。〇〇が何ベクレルということが書いてあるんです。これを見ながら買い物をするわけです。

あるお肉屋に貼ってある数値。この肉は2ベクレルだから売ろうと決めました、下の方は65ベクレルあったので、危険だと思って売っていませんと書いてあります。日本は500ベクレルですよ。

ぼくは事故から3年後に漸くチェルノブイリの被災地を回ることができたのですが、何を食べたら良いのかわからない、食べ物があるがすごく汚染されている、何を選べばわからないという状況でしたので、まず日本から救援物資として食品測定器を持って行きました。日本製で250キログラムくらいありました。

持ち込んだ先は、学校の校長室です。政府が安全だということが信じられない、自分たちの手で調べたいということで、校長室が市民測定室になりました。

そういうことがあったので、日本で事故が起きて、5月頃に福島の人が案内してくれたときに、日本でも、まずしなくちゃいけないのが食品測定じゃないかと訴えました。ものすごく高価な機械ですから、「DAYS」*のほうで基金を作って、「チェルノブイリ子ども基金」*のほうでこのための募金活動をするということでお金を集めて、お金はこちらで用意します、機械もこちらで用意します。あなた方は運営するような準備を始めてくださいということで、6か

所くらい、にいろいろな形で支援した団体がスタートしています。



つい数日前もいわきで市民測定室のオープニングがあって、そこにこちらから送ったホールボディカウンターと食品測定器がフル活動しています。福島市が中心となって稼働していますが、宮城県でも南のほうで、農家の方たちですが、自分たちでまずお金を出して、自分たちは汚染されたものを売るわけにはいかないということで、測り始めています。

だけどこれは必要なことに比べたらほんのちよつとなんです。ね。「未来の福島子ども基金」とか、「DAYS JAPAN」の食品測定機支援募金とかで動いていますが、東京などでも、何を食べたらいいのかわからなくなってきたので、とくに柏とか取手とか、三郷とかにも市民測定所を作りたいということで運動をしています。

こういうような動きは全部、IAEA にとっては、非常に嫌な動きなんです。ね。

ここに映っている子どもは全員が、夏の保養に招待した甲状腺の手術をした子どもたちです。ベラルーシにありますが、ウクライナの子どもも少しいます。廃棄されていたサナトリウムをなんとかして学校サナトリウムとして使いたいといって政府に働きかけたりしたのがペトリアエフ教授です。外はなんとかかなるけど、中は何も無い、ベッドもないし、教材もない。協力してほしいと言われて、「チェルノブイリ子ども基金」が支援するプロジェクトを立ち上げました。

初期の頃は、現地を訪ねれば訪ねるほど、被害の深刻さがわかってきていきましたので、我々の小さな団体としてはどうしたらいいのか、全部を助けることはできない。だったら、せめて小児甲状腺がんの子どもたちが毎日飲まなくてはいけない薬を一日もかけることなく、それからその人たちのためのリハビリテーションセンターを作りたいとかを話し合いました。サナトリウムはここ「ナジェジダ」と、ウクライナの黒海沿岸の方にも建物を建てたりして、そこで保養する子どもたちの費用を払ったり、そういう支援を中心にやってきました。

この子どもたちが大きくなって赤ちゃんを産んでいく、あるいは学校で勉強するのも難しくなる。治療の問題とか、親の問題とか、いろいろと起こってきますので、奨学金とか、いろいろなことを「チェルノブイリ子ども基金」のほうで支援してきました。

今は 3.11 の前ではないか？

できることを必死になってやらなければ

いまは 3.11 の後だと言われている、終わりのようなムードの中で原発が輸出されるとか、新たな原発が稼働する、そんな事態になっています。

でも、実は 3.11 の後ではなく、3.11 の前にあるのではないか、そういう意識が必要なんです。次の 3.11 が起こったとき、自分たちは何を備えができていて、何を学んだのか、何を学んでいないのか。事故が起こったとき、あなたは何をしたのか、何をすべきだったのか。

後になってからいろいろと言う人がいますが、その瞬間に何ができたのかが大事だったんです。私たちはその数日間に何ができるような力をもつか。それが試されている。それが実際に、僕自身もそうですし、小出裕章さんも言っていたように、自分たちには力がなくて無念で、何もすることができなかった。もちろん、小さなことはみなやっているわけです、自分たちのフットワークの中で。だけど、それではダメだったんです。

先日、日本ペンクラブでも話をして、聞いているうちに腹がたってきたのですが、賛成の人も反対の人も、いろいろな人がいる会でもいいじゃないかと。それは福島事故前だったらよかったのかもしれない。原発推進政策をするという民主党を、みんなが選んだのですから。

でもその後でしっぺ返しがあって、ものすごい大きな犠牲を払って事故は起こりました。それでも学ばない人間。学ぶ人はいいんです、一緒に話し合っていけばいい。もっと前に気がつくべきだったなんて、僕はえらそうに言うつもりはありません。

でも、事故が起こってしまったあとで、あれをなかったことにしている人たちとは話できません。そんな人と話を合わせているよりも、やらなきゃいけないことがいっぱいあります。やれることもある。だから、みんなで歩調を合わせて話を進めましょうなんてことには、ぼくはあまり思っていません。できることを必死になってやらなきゃいけない。でないと、自分たちを守れない。そう思っています。



DAYS の 1 月号で浜岡のことを取り上げました。「浜岡」という言葉を「福島」に置き換えたなら、ここに書かれていることは全部起こってしまったのです。郡山市の公園には、「小学生以下のお子さんの利用は控えてください。中学生以上であっても、利用は 1 日あたり 1 時間程度にしてく

ださい」とあるのです。完全閉鎖をしなくちゃいけない状況ですよ。その後、この看板は取りはらわれたんです。中の土を入れ替えたからです。でも、雨は公園だけに降るわけではないんですよ。周辺全部降っているわけです、住宅街にも。さもこういった公共のところを除染をすればそれで済むと思っている、除染は、そういう人間たちの言い逃れに使われていく、そういうことになっています。

子どもたちを避難させよう

それまでは、「福島民報」も「福島民友」も、政府は安全だと言っている、電力会社も、医者たちは心配ないと言っている、そればかり伝え続けていた新聞が、7 月 4 日から初めて「原発大難 後悔したくない」というようなタイトルを 1 面に使われ始めたんです。こういう新聞が茶の間に届け始めるといことは、家の中で娘や嫁、孫とかが避難するということを訴えていた人たちつぶしていたおじいさんとか、男たちが、これを見ることによって初めて、やっぱりそうかと思いはじめていくんですね。孫を逃がした方がいいんじゃないかとか。

そういうことに危機感を感じた行政や医者や、そういう人間たちがそれを押さえ込もうとしているのです。

だから、私たちの運動というのは、測定器を贈るといことが中心になってきたけど——その間に人々は逃げると思っていたんですよ、夏休みがあったし、いったん外に出て、そのままの流れができるのではないかと思っただけなんです。やはりもう一度、私たちは「疎開」ということに、思いっきり持っている力を出して、いろいろなところに圧力をかけながらも、自分たちができることをしなければならぬ。

政府になんとかを要求して、やってくれないからこうなんだ、という時代はもう終わったのです。自分たちでやるほかはないのです。

~~~~~  
注) 講演の抄録です。全文はチェルノブイリ子ども基金のサイトを  
ごらんください。4 月の講演については 6 月発行の基金ニュース  
上に掲載しています。こちらの報告もサイトに掲載しています。また、  
当日ユーストリーム中継が入りました。こちらの URL で動画を  
ご覧いただくことができます。

<http://www.ustream.tv/recorded/18638304>

[参考]・DAYS 放射能測定器支援募金

郵便振替番号 00130-4-417863

・未来の福島子ども基金

郵便振替番号 00190-0-496774

口座名称 チェルノブイリから日本を考える会

# 黒部ドクターのお話



## 子どもを放射能から守るために

### 少しでもリスクをさける家庭での過ごし方

内部被ばくでの問題で、放射性ヨードについては、乳児を除けば、日本人は、ヨードを食事から摂ることが多く、海産物（海藻は昆布、昆布だし、ひじき、わかめ。魚は、さけ、かつお、かれい、たら、すずき、かきの順）を今後も積極的に食べましょう。

セシウムは体内ではカリウムと同じように動きまわすから、カリウムを充分補給する（食べる）しかありません。100～200日で8割は尿に排泄されますから、カリウムを十分摂って腎臓で再吸収されなければよいと思います。あくまで食品で補給しましょう。セシウムは筋肉に貯まりやすく、そのため、心筋つまり心臓の障害が生じます。また生殖器に入ると遺伝的影響が出やすくなります。

ストロンチウムはカルシウムと同じように動き、骨に入りやすいのです。カルシウムは骨と血液を循環していますが、ストロンチウムは不明です。カルシウムは牛乳より小魚のほうが吸収がよいです。

一般に、牛乳は就学前の子どもの最も普通の食品ですが、放射線濃度を高める原因です。牛乳や乳製品の消費率が高いと放射線濃度は高くなります（バンダジェフスキー論文）。一般の哺乳類は、幼児期になると母乳を消化する乳糖分解酵素を産生する遺伝子の働きが止まり、母乳を飲めなくなります。なぜ人が牛乳を飲めるのかは判っていませんが、飲むと下痢をする人がいることも判っており、それは農耕民族に多いというデータはあります。人にとって牛乳は飲む必然性のない食品であり、牛乳に替わる他の食品で栄養を摂ればよいのです。歴史的にも日本人が、一般的に牛乳を飲むようになったのは、明治時代以後です。

セシウムについては、食品ごとに測定して比較的低い物を食べるしかありません。

今、食品中の放射線量を測定する機器が輸入され、日本でも作られ始めました。自分たちで「市民放射能検査所」を立ち上げ、市民のために、市民の手で測定しましょう。

### 雨の日の過ごし方について

今は空気中の放射能の濃度が低い所が多いですが、大気中の放射線量が高い所は、雨の降り始めに、放射能が含まれているため、降り始めに外へ出ることを避けましょう。雨に濡れないように防備することです。傘とレインコート、長い雨靴を使用し、着ている服は濡れないようにすることです。雨具は室内に入れない方がよいです。

### マスクの有効性について

放射性ヨードは気体ですし、セシウムが付着する粉塵は、0.02～0.1マイクロという小さい物ですから、普通のマスクは通過します。スギ花粉は20マイクロです。

### 保養について

ベラルーシのチェルノブイリ汚染地区の子どもたちは、1年に1度汚染されていない土地のサナトリウムで保養をすることが国によって決められています。学校単位で、24日間汚染されていない牛乳や肉類、野菜などの食べ物を摂ります。クラブ活動もできます。チェルノブイリ子ども基金は、学校が夏休みの期間に、白血病や甲状腺がん、脳腫瘍などの子どもたちを招待してきました(\*)。そこで、孤立していた子どもたちに連帯感が生まれます。子ども基金は、パソコンを寄付し、ボランティアに頼んで、武道、折り紙などの日本のことを教える「日本週間」という催しを行ってきました。子どもたちは生きる希望を持って帰ります。これによって、子どもたちは、免疫力が高まり、内部被ばくも減り、病気になりにくい体を作ります。ぜひ、福島の子もたちも、冬休み、春休み、夏休みは、汚染地から離れるよう保養に出してあげてください。できるだけ費用がかからないような方法を考えて、汚染地から離れましょう。楽しんで、将来への夢（希望）をもつことです。

(\*)「希望21」については18ページをご参照ください。子ども基金では夏の特別保養のほかに、年間を通して「希望21」に滞在する子どもたちの保養費も支援しています。

黒部信一：埼玉県新座市堀之内病院 小児科医師  
黒部信一のブログ <http://kurobe-shin.no-blog.jp/>



## 里親のページ

### 里子の家族からの手紙

ゴメリで日本展が開催され、家族揃って行ってきました。美しいものや興味深いものをたくさん見ました。とてもきれいな家々、生活用品、かわいらしい玩具、色彩豊かな着物や履物などがありました。特に目をひいたのは、結婚式の衣装を身に付けた花嫁花婿でした。桜の木も素晴らしかったです。この展覧会で着物を着て写真を撮ることができ、私たちも大喜びでやりました。そしてあなたに写真をお送りすることにしましたのです。きっと気に入ってもらえると思います。リーザもあなたのお誕生日のお祝いに絵を描きました。お誕生日おめでとうございます。神様のご加護がありますように。(追伸：あなたが送ってくださったセーターはリーザにぴったりで、リーザも私もすっかり気に入ってしまいました。)

(ベラルーシ ゴメリ市)

\*\*\*\*\*

腫瘍病の子どもたちを会員にもつ、ベラルーシの慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」代表パホワさんに、子どもたちをめぐる状況について話を聞きました。日本の里親から支援を受けている多くの子どもは、この団体の会員です。現在も、新しい会員が増えています。

**1) 体内放射線量の測定：**現在、学校では子どもの体内放射線量を測定していません。25年を経て人々は放射能のことを心配しなくなってきています。測定するようという宣伝活動もされていません。一方、ゴメリ市の住民は放射線医学センターで体内放射線量を測定することができます。しかし医療機関などからの検査指令書が必要です。それがない場合は有

料(約1ドル)です。

**2) 食品：**放射線汚染地域に住む子どものための国の支援プログラムは存在しています。学校の給食は無料です。また子どもたちは年に1度、健康回復のための保養券が提供されます。子どもたちに提供されるすべての食品は、国の基準を満たしており、衛生・疫学局の検査が行われている、ということになっています。

**3) 健康診断：**すべての子どもたちに年に1度、無料で健康診断が行われます。検査の結果何か発見されれば、さらに詳しい検査を行うための必要な医療機関に送られます。

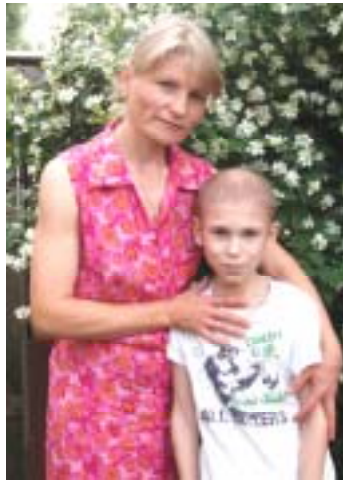
農村部には特別なセンターや機器がありません。放射線測定には町まで行かなければなりません。わざわざ交通費や検査料を払ってまで検査を受けに行く人はまずいないと思います。農村部の人たちや、町に住んでいても郊外に畑を持つ人たちは自家製の野菜、乳製品、卵などを日々食べているのです。私たちの団体は設立22年になります。団体の活動を開始した当初は、子どもの死亡率がとても高かったです。子どもはさまざまな腫瘍(白血病、肝臓がん、脳腫瘍)で亡くなりました。甲状腺がんの子どもたちの死亡の原因は、甲状腺がんそのものではなく、それに伴う病気によるものです。10月31日、モーズィリ市の6歳の女の子が亡くなりました。3歳で腹膜後腔の神経芽細胞腫発病し、治療を終え小康状態にありました。しかし昨年から気管支に問題が起き始め、それが原因で亡くなったのです。

現在、新たな里親を募集中です(甲状腺がんの手術を受けた子ども2名、他)。詳しくは事務局へお問い合わせください。資料お送りします。

## 2011年6月 家族訪問・ベラルーシ (その2)

M・イリーナ(1987年生まれ)娘クリスティーナ(2003年生まれ) ゴメリ市

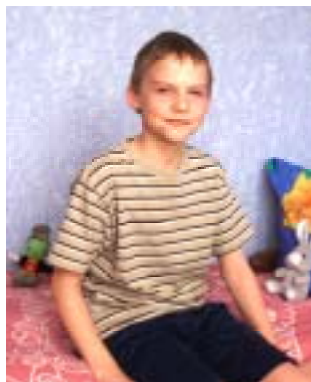
クリスティーナはターナー症候群という染色体異常(染色体の数が一つ足りない)をもって生まれた。成長のためのホルモン剤が不可欠であり、2ヶ月に一度ミンスクの病院でホルモン剤を処方されていたが、ベラルーシ国内での販売が停止になった。外国製の薬は高価なため購入できなくなっている。甲状腺と心臓にも異常が発見された。甲状腺ホルモン剤を服用。母親イリーナは10歳で甲状腺ガンの手術、放射性ヨード治療を受けた。「クリスティーナが生まれた時には1カ月しか生きられないと言われていました。今8歳になりましたが、同年代の子に比べて体がとても小さいです。今後女性としての性徴がないだろうと言われていました。クリスティーナは妹をほしがっているけれど、私はもう子どもを作るのは怖い」



K・サーシャ(1998年生まれ)

ゴメリ市

膀胱がん。両肺への転移。2006年の手術後、翌年の夏まで治療が続いた。その後は定期検査を受け3年間は問題なかったが、2010年再度膀胱に腫瘍が見つかった。化学療養を受けた後、手術で腫瘍を摘出した。現在の体調はよくない。排尿がうまくいかない。食欲がなく、太れない。大変疲れやすく、ほとんど家の中で過ごし



ている。弟アンドレイ(2000年生まれ)はよく肺炎にかかる。視力が極端に悪い。父親は背骨のヘルニアと胃潰瘍を患っている。「昔の男たちは70歳・80歳になっても元気で力仕事をしていた。ところが今は40歳くらいであちこちの骨が痛いとか、どこかが病気だという人ばかりだ」と話した。サーシャは昨年、「希望21」で行われた『腫瘍病の子どものための特別保養』に参加していたが、

今年は体調が悪化したため参加できなかった。昨年はサナトリウムで友達と走り回っていたが、今回訪れてみると、背は伸びていたものの体は痩せていて、「足が痛くて歩くのも辛い」と話した。

S・アンドレイ(1999年生まれ)ゴメリ地区ポコリュウヴィチ村

脳室と小脳虫部の髄芽細胞腫。2009年発病。翌年5月に手術、6月から化学療法、現在も続いている。食欲がなく体重が

激減した。右目が見えない。手術後は自宅学習をしている。外を歩くときは介添が必要。ほとんど家の中で過ごしている。部屋には自分で組み立てたブロックのおもちゃが並べられていた。免疫力が低いため、ミンスクの病院には車を頼んで連れて行かなければならず、ガソリン代・運転手への謝礼を支払っている。入院中の薬は無料だが、今年になってから薬に関する免除がなくなり自費で購入しなければならなくなった。この村は放射性セシウム137が5~15キュリー、移住権利のある区域。しかし財政を理由に移住は実行されず、住民は今も住み続けている。村の子どもたちは年に一度国内のサナトリウムに行く権利がある。

(報告:佐々木 真理)



早いもので6年になるこのミンスク便りですが、ニュース誌面でお届けするのは今回で最後となりました。毎年季節の移り変わりに伴って私の頭に浮かんでくるのは同じようなことばかりですが、それでも町の様子は少しずつ変化し、考えてみれば、自分の身近な場所だけでも変わった点を幾つも挙げることができます。

もうすぐ終わろうとしている2011年は、この6年の間でも、ベラルーシにとって重要な年であったように思います。今年チェルノブイリ原発事故から25年という節目の年でしたが、25周年を迎える一か月前に起こった日本の大震災は、ベラルーシの人々にも大きな衝撃を与えました。

もともとベラルーシにとって日本は、遠く謎に満ちた国でありながら、特別の親近感を抱く対象でした。それは、広島・長崎とチェルノブイリという共通の悲劇が結ぶ絆であり、チェルノブイリ事故被災者への支援を続ける日本への感謝の念でもありました。

今回の地震・津波の被害と、何よりフクシマの事故に、世界中の誰よりも心を痛めているのは、ベラルーシの人々かもしれません。募金・救援物資や被災者受け入れの申し出などが、一般市民から次々と寄せられたのには驚きました。

ベラルーシ人も忘れようとしているチェルノブイリが今になって再び注目を集めているのは、何とも皮肉なことです。チェルノブイリの経験を学ぼう、伝えよう、と、これから日本とベラルーシの交流は一層活発になるでしょう。

この文章では、チェルノブイリだけではないベラルーシの人々の暮らしぶりをお伝えしてきたつもりです。今後は場所を変え、子ども基金のブログにミンスクからのお便りを載せていただくと思っています。これまでのご支援に感謝申し上げますとともに、引き続きのご指導をどうぞよろしくお願い申し上げます。

【最終回】

花田朋子：ミンスク在住

## 11/20 講演「チェルノブイリと福島」ご来場者の感想

25年を経過してもなお、というか、次世代にわたってその影響があることを知らせていただきありがとうございました。(40代 女性)

自主防衛が大事とわかりました。(20代 男性)

どの話も大変参考になった。地道に活動を続けて下さる事に心から感謝したい。(40代 女性)

広河さんのお話を聞いていて胸がドキドキしてきました。今が3.11前だという言葉が身に沁みました。何をすべきか何をすべきだったのか、それは一庶民の私も考えていくことと肝に銘じました。(50代 女性)

今まで放射線のことを軽く考えていたので驚きました。全てのことに半信半疑で考えて生きたいと思えます。将来、少しでもこういう活動に参加していきたいです。(10代 男性)

チェルノブイリの被害が今後の日本と重なって気

分が沈みました。0歳4ヶ月の娘がいますが、母子は妻の実家の岐阜に避難させています。汚染された東京では家族3人で暮らせないと考え、静岡へ移住することにしました。(40代 男性)

来年度より横浜の保育園で働くのですが福島はもちろん関東圏の子どもたちの環境がとても不安です。自分は東北出身で、福島大好きです。日本の子どもたちを守りたいので、被爆について、子どもを守る方法を勉強することにしました。色々な人の話を聞きに行こうと思いました。今日この講演に来られてよかったです。(20代 女性)

大変有意義なそして今日誰もが知っておかねばならないことを教えていただき有難うございました。一歩でも二歩でも反原発をすすめないで日本や世界の明日はないと思います。(50代 男性)





## 「希望 21」(ベラルーシ)

1994年に開設された「希望 21」の現在までの活動状況を報告します。(11/20講演会で配布した資料です。)

### <これまでの受け入れ人数と期間>

1994年～1999年：1度に160人、2か月間

1999年～現在：1度に285人、24日間

### <実際の経費に対して、国が支払

う栄養費用の割合> 1994～2005

年：60-65% / 2006～2007年：70%

/ 2008～2009年：75 - 80% /

2010年：90% / 2011年：75%

不足分は、旅行部門(一般旅行者やサマーキャンプの子どもたちを受け入れている)で得ている収入や、子ども基金をはじめとする外国のNGOからの支援などで賄っている。



### <食品とその放射線検査の状況>

#### 1. 食品の放射線検査

食堂に納入される食品に対し、2004年まで独自に抜き取りによる放射線検査を行っていた。その後、以下のように状況が変化。

納入されるすべての食品に、「原料と食料品の品質と安全性の証明書」が付くようになった(国の規則による)。証明書は納入機関や食品の生産者に交付される。放射線検査済であること、放射性物質の含有量が表示されている。数値は許容水準(ベラルーシ政府が設定した数値)以下でなければならない。これにより納入される食品の安全性が確認できるようになった。

2001年、「希望 21」に農業部門が作られた。安全な環境で栽培された農作物を食堂に供給することが目的。これらの作物は市の衛生・疫学センターで検査を受けます。自家製農作物の安全性も確認できるようになった。

#### 2. 体内放射線量を減らすための方策

##### 1)放射線測定とペクチン剤( )

2000年半ばまでは保養の最初と最後に全員に対し、体内の放射線測定を行っていた。その後、何人かを選んで検査を行うようになった。2004年、放射性物質を排出する合理的な食品を摂取しながら24日間を過ごすことで体内のセシウムが平均して20%低下するということが結論付けられた。24日間ペクチン剤

を服用することでも同じ結果。「希望21」ではよい環境で栽培された定量の農業生産物を子どもたちに提供しているため、滞在中の子どもたちにペクチン剤を与える必要はないと考えている。(大量のペクチンを一度に効果的に摂ることを目的に開発されたサプリメント。)

##### 2)体内から放射性物質を排出するための食事

放射性物質を吸着・排出する効果のある食物繊維とペクチンが含まれている食事を第一に提供している(新鮮な野菜、果物、天然果汁など)。子どもたちが摂取するこれらの食品の分量は、国の規定に従っている。

### “2012年チェルノブイリ救援カレンダー”に登場する子どもたちについて

おかげさまでカレンダーは完売いたしました。「カレンダーの写真に説明があった方がよかった」というお声をいくつかいただきました。下記にご紹介します。

1月：プリピャチ市から避難し、キエフ市の学校に転校した子ども。 / 2月：キエフ郊外の村に暮らす、甲状腺がんの手術を受けた子ども。結婚しました。 / 3月：汚染地域クラスノポリエで行われていた結婚式に参加していた子ども。 / 4月・7月・9月：ベラルーシ「希望 21」。「甲状腺手術後の子どもたちのための特別保養」参加者。3人の女の子は結婚、2人は母親になっています。 / 5月・6月：甲状腺がんの手術を受けた子ども。 / 8月：ペリコボルスキー国営農場の子どもたち。当時検査した10人の子どもたち全員からプルトニウムが検出された。 / 10月：ウクライナ・ナロジチ。左から3人目の少女は、結婚して母親になっています。 / 11月：プリピャチ市からキエフ市に移住。上の子どもは慢性の肝臓障害。 / 12月：事故当時3歳だった女の子は、4年生の時に甲状腺がんの手術を受けた。結婚しました。(以上、すべて広河隆一撮影)最終頁「子ども基金」が支援している家族・子ども：2011年5・6月、ベラルーシ・ウクライナのサナトリウムで行われた保養に参加した子どもたち。自宅療養中の腫瘍病の子どもと母親。佐々木真理 撮影。

●募金状況 2011年9月～11月 (単位:円)

|         | 9月         | 10月     | 11月         |
|---------|------------|---------|-------------|
| 募金件数    | 202件       | 225件    | 119件        |
| 救援寄付金   | 1,145,211  | 561,121 | **2,126,822 |
| 保養費     | 74,083     | 40,800  | 29,700      |
| 特別保養費   | *1,429,401 | 70,000  | -           |
| 特別保養賛同金 | -          | 1,000   | -           |
| 里子支援    | 146,550    | 30,870  | 136,540     |
| 医療機器支援  | 102,000    | 91,000  | 48,000      |
| ニュース購読費 | 56,000     | 50,000  | 36,000      |
| 合計      | 2,953,245  | 844,791 | 2,377,062   |

\*パルシステム東京の平和カンパ 1,324,401円含む

\*\*匿名の方よりの募金2万ドルを含む

●救援状況 2011年9月～11月 (単位:円)

<ウクライナ>

◎子どもたちの生存

医療機器支援(人工呼吸器、保育器) 3,848,700

◎内分泌研究所

医薬品('11.1～12月分) 774,800

<ベラルーシ>

◎ゴメリ小児病院

医療機器支援(心電図モニター) 2,325,220

\*\*\*\*\*

チェルノブイリの歌声 ～カレンダー購入者の方より～

\*子ども達の笑顔が可愛らしくて、素晴らしいですね。チェルノブイリ被災の子ども達も福島被災の子ども達にも、もっともっと笑顔になって貰いたいです。(愛知県 Sさん)

\*今回の福島原発事故では、「ずっと、そういうことを心配してきた…」と毎年チェルノブイリのカレンダーを掛け続けてきて良かったと思っています。教訓は生かされませんでした。少しでも良い方向に向かうよう祈っています。(東京都 Hさん)

\*一日も早く原発が廃炉されること、元の暮らしに戻ることを祈っています。(北海道 Wさん)

\*二度と起きてはいけないことが起きてしまい、本当に残念です。(東京都 Yさん)

\*今回の震災で、ますますエネルギー問題や、安心安全に生きていくために自分たちができることをもっと真剣に考えねばならないと痛感しています。日々職場で、また家庭で子どもたちからのメッセージを見ながら、身近なところでできることを実践したい

♥ 募金団体名一覧 ♥

紙面の都合上、個人名は省略させていただいております。ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

【9月】実教出版 放射能倶楽部/(株)ジョイメイト/パルシステム東京平和カンパ/函館白百合学園中学高等学校/キッチンミンスク/トランスフェリックマネジメント/民宿夢民村/小金井学習センター

【10月】木村眼科クリニック/千葉友の会/(有)せき自動車工業/トランスフェリックマネジメント/ヒーリングスペース レイ/(株)ジョイメイト/(有)ジェントル

【11月】トランスフェリックマネジメント/イラク写真展の会 三重名張有志/すずしろ医療生活協同組合/(株)ジョイメイト/リサイクルグループ カリーナ/恵泉女学園中学・高等学校文化祭委員会/(有)宝来書店/(株)デイズ ジャパン/真宗大谷派 高德寺/山口歯科医院/「祝の島」自主上映実行委員会

\*\*\*\*\*

医療機器募金収支 (12/1 現在)

報告については2～3頁をご覧ください。  
※差額は一般寄付金より振替えました。

◆収入(募金) 252件 758,000円  
◆支出(支援) 6,173,920円

ウクライナ 3,848,700円  
ベラルーシ 2,325,220円

\*\*\*\*\*

と思います。(長野県 Sさん)

\*科学の発達はずばらしいけれど、いい方にも悪い方にも使われるのかと、おそろしいですね。来年一年間、だいにカレンダーを使わせていただきます。(東京都 Oさん)

\*絵が鮮明できれいです。(岩手県 Oさん)

\*福島での事故からチェルノブイリを他人事だと感じ得なくなりました。何か少しでも力になりたいと考えています。(鳥取県 Sさん)

\*チェルノブイリや福島のような事は二度と起きてはならないと思いますし、またこの経験や事実を風化させてはならないと思います…。(福島県 Oさん)

\*子ども達の笑顔に会えるのを楽しみにしています。辛抱強く継続していく活動を、微力ながら息長く応援したいと思っています。(北海道 Kさん)

# 事務局から

## ボランティア募集

事務局では、毎月第1・3土曜日の午後1時～5時、ボランティアの方に事務作業などを手伝っていただいています。1月は第1土曜日(1/7)のボランティア作業はお休みです。

ニュース発送作業(年4回:3・6・9・12月)  
次回 日時:3/24(土)午後1時～4時頃まで  
場所:東京ボランティア市民活動センター 会議室B  
(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10階)  
少しの時間でも歓迎です。

日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにご連絡ください。  
【問い】平日午前10時～午後5時半 留守の場合は伝言をお願いします。T&F 03-5228-2680

## 「基金ニュース」について

募金をくださった方には、用途の報告を兼ねた“ニュース”を原則1年間お送りしています。また、ニュース購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

## 振込用紙と領収証について

### すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

### 払込取扱票のお名前・ご住所は 楷書でわかりやすくご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

### 「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

### 「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書が入り用の際は申し出ください。

ご不明な点がございましたら問い合わせください。

## 年末年始の休みについて

12月28日(水)から1月5日(木)まで休みます。

## \*\*\* 緊急支援について \*\*\*

1997年に「希望21」で開催した特別保養に参加したウクライナのミーシャ(当時はウクライナの子どもベラルーシの「希望21」に招待していた)は、甲状腺がんの手術を3回受けました。この保養のおかげで元気を取り戻したのも束の間、彼には転移がみつきり緊急に手術が必要となりました。子ども基金は、フランスでの手術のための入院費・交通費など約130万円を支援しました。それから14年後、現在30歳になるミーシャに、また転移がみつかってしまいました。一刻を争うと判断したため、チェコの病院での検査代・渡航費の3000ドルのうち、2000ドルを支援することに決定しました(残り1000ドルはスウェーデンのNGOが支援)。チェルノブイリ事故の影響はこれほどまでに長い間、被害者を苦しめ続けているのです。

## 「講演 チェルノブイリと福島」資料について

広河さんの講演録全文および黒部さんの講演資料全文はホームページに掲載しています。また、プリントしたものが必要な方はお問い合わせください。

「モスクワ便り」から引き継いだ「ミンスク便り」、残念ながら今号が最終回です。花田さんに感謝です!

\*\*\* チェルノブイリ26周年救援イベントについて \*\*\*  
チェルノブイリ26周年イベント(2012年4月22日)は広河隆一講演、ほか海外からのゲストを予定。詳細は次号基金ニュースでお知らせします。\*\*\*

## < 編集後記 >

今年は4月と11月、2回の広河講演会があった。地震後、すぐに福島原発に向かった広河さんの話は4月に聞いた時、なまなましかった。時が経ち、怒りが増幅し同じ内容の話をしているのに違う話のように聞こえた。被災した人たちの怒りはいかにばかりか。できることをやらねばならない。(む)

あまりにも大きな出来事が起きてしまったこの2011年、歴史にどのように刻まれるのだろう。「来年こそ明るい年」と言うのも虚しいが、自分の立ち位置を見極め、歩を進めたい。(み)

チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年4回発行

〒162-0816 東京都新宿区白銀町25 メゾンド原207号室 Tel/Fax 03-5228-2680

ウェブサイト = <http://www.smn.co.jp/cherno/index.html> e-mail: [cherno1986@tokyo.email.ne.jp](mailto:cherno1986@tokyo.email.ne.jp)

事務局ブログ 神楽坂事務局だより <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。

現地メディアによるチェルノブイリ関連ニュース、翻訳の上、随時ブログ・ウェブで更新中